

門前町に生きる

— 過去・現在・未来 —

第9回 おどり花見

成田市の観光案内を見ると、4月3日はおどり花見と書かれている。大きく宣伝されるほかの観光行事の間に埋もれて目立たない存在だが、その起源は江戸時代の元禄年間にさかのぼるといわれており、長きにわたって門前の女性たちによって受け継がれてきた大切な神事なのである。なぜ花見踊りではなくおどり花見という名称なのか、確たることは分からない。花見のために踊るのではなく、神をいさめ、悪霊を退散させることが目的だという見方もある。ここで踊られる弥勒踊りは、「あんば大杉大明神、悪魔を払ってよういやさ」という掛け声で締めくくられる。門前町の女性たちは、桜の花の咲くころに町を踊って回り、平安な暮らしを祈ってきたのであろう。

現在、おどり花見は旧成田町の7町の女性が輪番で行っている。それぞれの町には女人講にょにんこうという女性の集まりがあり、2月18日のオビシャと4月3日のおどり花見を担っている。オビシャでは、共通の神である子安さまを7つの町で順繰りに回すが、1年間のお宿を務め、ご神体を次に回した町が、その年のおどり花見の当番になる。当番町の女性たちはそろいの着物に身を包み、襟に手ぬぐいをかけ、桜のかんざしを髪に挿す。町の鎮守である三ノ宮はぶ壇生神社から始まり、各町の神仏と新勝寺の境内を一日かけて巡り歩くのだ。15人衆と呼ばれる世話人が神仏の前で称え歌を歌うと、それに合わせて当番町の女の子が、パチの先を見つめながら、ゆっくりと神降ろしの太鼓をたたく。そのあと、女人講全員による弥勒踊りと余興の踊りが披露される。踊りの一行を迎える町では、その町の女性たちがそろいの着物で出迎えて、茶菓や手作りの料理でもてなし、お酒やお茶で褒め歌の応酬をする。

そろいの着物を最初に作ったのは本町だという。諸岡保枝さん(大正14年生まれ)の記憶によれば、若いお嫁さんたちは実家から持ってきた着物を着て踊っていたが、お里の経済状態によって格差が出るのはかわいそうだとしたことになり、昭和



昭和27年4月4日、上町清水医院正面玄関前。当番町は上町。当時は4月3日と4日の2日間にわたり行われた。子どもはまだそろいの着物がなく、七五三や十三詣りのために作った着物で参加した(上町の黒田千春さん提供)。

11年の当番のとき、当時出たばかりの人絹じんけんで、初めてそろいの着物を作ったそう。本町や仲町ではあまり余興の民謡などは踊らず、弥勒踊りを主にしていたが、中にはおかめやひよつとこの面をつけ、着物の裾をからげて陽気に余興を踊っていた町もある。上町では料亭の芸者さんが三味線を弾き、太鼓も加わって、昔ながらの弥勒踊りでさえも町場の華やぎがあった。戦後になるとすべての町で着物をそろえ、7年ごとに、あるいは着物と帯を交互に新調していくようになる。神事なので、身に着けるものの何かひとつは新しくしていくのだという。余興の踊りもお師匠さんに習うようになり、工夫を凝らした創作の踊りも加わって、伝統行事に新たな息吹をもたらした。

おどり花見は昭和39年4月に県の無形民俗文化財に指定された。それまで町の人々は花見踊りと言い習わしてきたが、これを機におどり花見と呼称が統一されていった。町に残る資料を見ると、これと並行するように、昭和45年ごろから、それまで子安講こやすこうや女連と呼んでいたものを、どこの町でも女人講と称するようになる。新たに花車が作られ、半纏はんてんを着た若衆も加わって町を巡り、春の日の行事は一層華やかさを増した。門前町に嫁いで来た女性は、女人講の活発な活動に驚くそう。最初は戸惑いながらも、7年に一度巡り来る行事は人生の節目づくり、年を重ねるごとに、おどり花見の当番で踊れることの重みが増していく。再び当番が巡ってきて新しい着物に袖を通すとき、門前の女性は、町の神事を担う誇りと、7年を無事に過ぎた喜びをかみしめる。

(久保田 滋子)

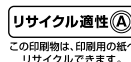
編集後記

おどり花見、取香さんばそうの三番叟、北羽鳥香取神社獅子舞、西大須賀の獅子神楽…。この季節、市内各所で神事が催されました。これらは春の訪れを告げ、五穀豊穡、子孫繁栄などを神々に願い感謝するものです。そして地区の繁栄と人々の結び付きを強める大切な行事の一つです。神事を通じ、感謝の気持ち、人の繋がりの大切さを伝えられたなら、どんなに素晴らしいだろう。広報なりたがその一助となれば、と気持ちを新たにしています。

平成27年4月15日号 No.1289

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。